

直方市文化芸術審議会 第5回会議 議事録

日 時	令和8年6月26日（金）14：00 ～ 16：00
場 所	直方市中央公民館2階 第1学習室
出席者	小島 立 （会長） 牛嶋 英俊 （副会長） 棟形 和義 （委員） 市川 靖子 （委員） 曾根 富久恵 （委員） 鷺野 彰子 （委員） 五日市委員会 関係者1名 直方市民劇場 関係者2名
事務局	文化・スポーツ推進課長、社会教育係長、社会教育係職員
傍聴者	1人
議題	（1） 第4回会議を踏まえた振興計画の修正案について （2） 文化芸術×まちづくり

直方市文化芸術審議会 第5回会議 議事録

◎議事録 (事務局)	1. 開式 皆さま、本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。 定刻となりましたので、第5回直方市文化芸術審議会を開催いたします。 本日の会議は、前回審議会の振り返りと計画修正内容の確認、あわせて文化芸術とまちづくりの連携をテーマに議論を行います。 また後半では、日頃より商店街で活動されています「五日市委員会」「直方市民劇場」の方にお越しいただき、現場のご意見をいただきながら活発な意見交換ができればと思います。 それではここからの議事進行につきましては、小島会長にお願いしたいと思います。小島会長、よろしくお願いいたします。
(会長)	それではまず、第4回審議会以降の計画修正内容について、事務局よりご説明をお願いいたします。
(事務局)	2. 議題(1) 第4回会議を踏まえた振興計画の修正案について この資料を事前に配布していたことや、限られた時間であることを踏まえて、簡潔に説明していきます。次のスライドです。 今回の修正・追記箇所は全部で5箇所です。1つずつ説明していきます。 修正①は、「1.5 直方市の文化的特性」への再追記です。前回会議では、直方市の歴史について、炭鉱や中心市街地だけでなく、植木、感田、上頓野など、各地域に残る歴史にも目を向けるべきではないかというご意見をいただきました。また、平安時代以前の歴史や仏教文化、直方の地名の由来についても記載してはどうかというご意見もありました。 これを踏まえ、これまで江戸から明治を中心としていた記述を、旧石器時代から古代・中世・近世、そして明治以降の石炭産業や鉄道の発展まで、時代の流れに沿って整理し直しました。あわせて、感田、植木、上頓野など各地域に残る歴史や文化資源にも触れる内容としています。また、「直方」という地名の由来についても追記しました。今回の歴史部分の整理にあたっては、本市の文化財担当者に協力をしていただき内容を整理しています。 続いて、修正②と修正③です。修正②では、「1.6 本市における文化芸術の課題」に、「地域に点在する文化資源の見える化と活用」を新設しました。第4回審議会では、地域ごとの歴史資源が市民に十分伝わっていないことや、教育・観光など他分野に十分活かされていないのではないかと

	いうご意見がありました。そのため、各地域に点在する歴史資源や文化財、民俗芸能などを整理し、市民に分かりやすく発信すること、また地域への誇りや愛着を育む仕組みづくりが必要であることを課題として追記しました。 修正③では、「3.3 地域の文化財・文化資源の保存と活用」を修正しています。これまでは、保存や修理、伝承者育成、観光振興への活用といった視点が中心でしたが、今回の修正では、文化財や文化資源を単に保存対象として捉えるだけでなく、地域の成り立ちや暮らしを伝える学びの資源として活用する視点を加えました。学校教育や社会教育における活用にもつなげる内容としています。 続いて、修正④です。空欄となっていた「3.地域の文化財・文化資源の保存と活用 基本施策3-①」について、「現状と課題」「実行プランの目的」「取り組み例」を記入しました。現状と課題では、石炭記念館や炭鉱関連資源だけでなく、市内各地域に古代から近代に至る歴史資源や文化財が点在している一方で、それらが市民に十分共有されていないことを整理しています。実行プランの目的では、市内各地域の歴史資源、文化財、民俗芸能などを整理し、市民に分かりやすく発信すること、また教育・観光・福祉など他分野と連携して活用することを掲げています。取り組み例としては、直方バーチャルミュージアムを活用した地域文化資源の発信や、市内各地域に残る歴史資源・文化財の整理と情報発信を記載しました。 最後に修正⑤です。基本施策4-③「文化芸術×子育て・教育」についても、空欄となっていた「現状と課題」「実行プランの目的」「取り組み例」を記入しました。この部分は、第4回審議会では学校教育課の中島さんにご出席いただき、学校での取組や題についてご説明いただいた内容を踏まえて整理しています。現状と課題では、高取焼体験、茶道体験石炭記念館見学、音楽・演劇鑑賞、伝統太鼓、職業体験など、学校ですで行われている取組を記載しました。一方で、予算や時間、教員負担、人材情報の把握、家庭環境や居住地域による文化体験の差などを課題として整理しています。実行プランの目的では、幼少期から多様な文化芸術に触れ、地域の歴史や文化を学ぶ機会を広げること掲げました。取り組み例としては、学校教育と連携した文化芸術体験・学習プログラムの充実、文化施設・人材、団体の情報整理、子どもや親子向け体験の充実、バーチャルミュージアムの活用などを記載しています。 以上5箇所が追記・修正点となります。反映させるべき点が多く、ボリュームが大きくなっていますが、ご確認いただければと思います。以上で
--	--

(会長)	す。 ありがとうございました。 非常に意欲的に修正をいただきまして、心から感謝しております。ただいまご説明いただいた修正内容について、委員の皆様からご意見をいただきたいと思います。事務局からの説明のとおり今回の主な修正・追記箇所は、次の5点です。1点目は、「1.5 直方市の文化的特性」の「(3) 炭鉱以前から続く、直方のまちの歴史」へ再追記についてです。2点目は、「1.6 本市における文化芸術の課題 (SWOT 分析)」に「(5) 地域に点在する文化資源の見える化と活用」を新設した点です。3点目は、「3.3 地域の文化財・文化資源の保存と活用」の修正についてです。4点目は、空欄となっていた「3. 地域の文化財・文化資源の保存と活用 基本施策 3-①」の記入についてです。5点目は、空欄となっていた「4. 文化芸術による地域活性化と多様な交流・連携の推進 基本施策 4-③文化芸術×子育て・教育」の記入についてです。 第4回でも大変多くのご意見をいただきましたが、今回の修正に盛り込めていない視点や、反映の仕方がご意図とずれている部分もあるかもしれません。また、方向性として気になる点がございましたらぜひこの場でご指摘ください。限られた時間ではありますが、時間の範囲内でご意見をいただければと思います。 よろしくお願いいたします。いかがでしょうか。順に説明していきましょうか。資料の 1.5 についてよろしいですか。町の歴史についての内容です。各地の地名についても取り上げていただいております、歴史的には旧石器時代や縄文時代などの内容から記載されています。また、直方の地名の由来や近代に関する内容も記載されています。
(委員)	細かな点および事実関係についてですが、直方の町の歴史（炭鉱以前の歴史）の箇所において、直方の地名に関する記述があります。 その中で後半部分に、「一説には南北朝時代に由来し、天皇方を指して“直方”と呼ばれた」という趣旨の記載がありますが、これについては疑問があると考えています。 当時の用語として、天皇方は一般的に「宮方」と呼ばれており、「皇方(のおがた)」という呼称は用いられていません。史料的にもそのような記録は確認されていないと考えられます。このため、当該説は主に明治以降に成立した郷土史の中で見られる説明であり、後世的な解釈の可能性が高いと思われます。明治以降は、近代天皇制の成立とともに、郷土史におい

(会長)	て地域と皇統を結び付けるような伝承が多く見られる傾向があります。 例えばヤマトタケル伝説なども同様に、地名の由来を天皇や皇族の言動に結び付ける形で語られる事例が全国的に広まっています。そのため、本記述については歴史的事実として断定的に記載するのではなく、取り扱いには慎重であるべきではないかという意見です。また、関連する資料についても明確な一次史料は確認できず、後世の郷土史資料に基づく可能性が高いと考えられます。以上の理由から、本説については掲載の是非を再検討した方がよいのではないかと考えます。 作られた伝統という考え方もありますが、そうした観点からの話だと受け止めました。この点については、事務局および関係者の皆さまでもう一度ご検討いただければと思います。 また、私は別の場面でこの内容に触れたこともありましたが、その際は今回のような視点については承知しておりませんでした。ご指摘ありがとうございます。 他にご意見等はございますか。よろしいでしょうか。それでは、本件については本日時間も限られておりますので、一度ご一読いただき、追加でお気づきの点があれば事務局へご連絡いただくということでお願いいたします。 続いて、次の議題に移ります。1.6 本市における文化芸術の課題についてですが、いかがでしょうか。こちらは問題意識や課題整理の部分になりますので、ご意見等ございましたらお願いいたします。 無いようですので、続きまして、第3章に進みます。3.3 地域の文化財・文化資源の保存と活用についてです。さらにその中の3-①の項目になります。この部分は、先ほどの1.5で議論された「地域に点在する文化資源の見える化と活用」と対応する内容であると認識しておりますが、いかがでしょうか。
(委員)	植木地区では、「植木フットパス」という取り組みを行っています。これは、単なるまち歩きではなく、地域の史跡や歴史などを巡りながら、楽しみつつ学んでもらうことを目的とした事業です。 この取組は継続して実施しており、近年では小学校とも連携し、校長の協力のもと児童も参加するなど、教育活動としても展開されています。子どもたちも地域の史跡や興味深い場所を実際に訪れ、学ぶ機会となっています。植木には、地元の方でも十分に知られていないような興味深い史跡や歴史資源が数多く存在しており、フットパスはそれらを再発見する

	機会にもなっています。そのため、地域住民自身に地域の魅力を理解してもらうことも大きな目的としています。取組は春と秋の年2回実施しています。 具体的には、文化財に限らず、地域資源についても対象としていますが、これらは現地でもあまり知られておらず、場所も分かりにくい状況にあります。そのため、実施時には草刈りや案内表示の設置などを行い、参加者が見学できるよう環境整備も行っています。また、これらの史跡については郷土研究会等とも連携し、由来や背景の調査・整理も行っています。 ただし、活動の担い手が高齢化していることもあり、継続的な運営には課題もあります。PRについては市報等で実施しているものの、より広く周知するためにはパンフレットの作成や多様な媒体での情報発信が必要であると考えています。 今後については、地域の歴史や伝統、これまでの実績を踏まえつつ、活動の整理も含めて検討していきたいと考えています。
(会長)	今のご説明に関連して、少し前後するかもしれませんが、バーチャルミュージアムについて伺います。先ほど修正案の中で関連する項目があったかと思いますが、バーチャルミュージアムについては、先ほど委員からご発言のあったような様々な地域資源を拾い上げながら構成していくものになるのではないかと理解しておりますが、その認識でよろしいでしょうか。その点について、事務局として現時点で把握している内容があればご教示いただきたいと思います。
(事務局)	バーチャルミュージアムについては、既にシステムとして整備されており、それぞれの文化財や地区ごとの文化財について、校区単位で検索できるようになっています。そのため、小学校等においても、自分たちの校区にはどのような文化財があるのかを調べる際に活用されており、実際に利用していただいています。現在も、こうした仕組みを通じて、児童が地元の文化財について学ぶことができる形が整えられています。
(委員)	例えば、先ほどのフットパスについても、毎回同じルートではないかもしれませんが、各地域の方が地域の資源を巡るような取組であると思います。従来、文化財というと、非常に価値の高いものを単体で保存・活用するという考え方が中心であり、世界遺産などもそうした流れの中にあったと思います。しかし近年では、個別の文化財だけではなく、複数の資

(委員)	源をつなぎ、文化的なルートや面的な広がりとして捉える考え方も出てきています。そのため、各地域に点在する複数の文化資源をうまくつなげ、「この地域にはこのような歴史や文化がある」という形で見せていくことが重要ではないかと思います。 その際には、時代の流れに沿って整理することもできますし、地域ごとの面的な広がりとして整理することもできると思います。バーチャルミュージアムであれば、紙媒体では難しい表現や見せ方も可能になるため、そうした特性を活かして構成していくことで、先ほどご指摘のあった地域資源の掘り起こしや活用にもつながるのではないかと考えます。 一方で、担い手や人材の問題については、今後さまざまな場面で課題になってくるものと認識しています。この点については、今後どのように対応していくか、引き続き検討が必要であると感じました。 関連して、バーチャルミュージアムは非常に面白い取組だと感じました。現在は校区ごとに文化財を検索できる仕組みになっているのですが、校区単位での活用は地域学習として有効である一方、ややローカルな範囲にとどまっている印象もあります。 例えば、旅行先を訪れる際には、市役所や自治体が発信しているおすすめスポットや観光情報を参考にすることがあります。そのような情報発信の中に、バーチャルミュージアムの内容や地域の文化財情報が組み込まれていれば、市外から訪れた人が「せっかくこの場所に来たので、周辺の文化財や関連するルートも巡ってみよう」と思うきっかけになるのではないのでしょうか。学校教育や地域学習での活用に加え、観光やまち歩きの導入口として活用できれば、文化財や地域資源の見える化にさらに広がりが出ると考えます。
(会長)	貴重な意見をありがとうございます。
(委員)	地域の文化財・文化資源の保存と活用に関連して、現在、私は仲間とともに「直方文化と歴史をつなぐ会」という地域おこしの活動に携わっています。 この会では、直方市内に分散している文化財や歴史的・文化的に価値のあるものを掘り起こし、保存し、市民や来訪者に見ていただけるような施設が必要ではないかという思いで活動しています。究極的には、直方市に文化財や歴史資料を保存・展示できる建物を整備してほしいという趣旨です。

(会長)	市内には、各所に散在している貴重な文化財や歴史資料、地域資源があると思います。それらを一箇所に集め、適切に保存・展示できる施設を整備することができれば、市民が直方の歴史や文化を知る機会になるだけでなく、観光振興にもつながるのではないかと考えています。 また、過去には建築家の磯崎新氏による直方の歴史資料館の設計計画があったと聞いています。その設計図は現在も残されており、磯崎新氏に関連する記念館等で確認できる状態にあると聞いています。なぜその計画が頓挫したのかは分かりませんが、過去にそのような構想があったことも踏まえる必要があると感じています。 分散している文化財や歴史資料をきちんと保存し、展示できる施設を直方市に整備すること、そしてそれを観光にもつなげていくことについて、ぜひ検討していただきたいと思います。
(委員)	ありがとうございます。ご指摘のとおり、直方市には美術館はありますが、いわゆる歴史博物館・歴史ミュージアムといった施設については整備されていない状況であり、私自身も市内で生活していく中で、その必要性について感じる場面はありました。文化・歴史の保存と活用という観点からは、そうした施設がないことは課題であるというご意見は理解できるものと考えています。 一方で、施設整備には財源等の課題も伴うため、実現には様々な検討が必要になると認識しています。例えば、既存施設である石炭記念館等との関係性や役割分担をどう整理するかといった点も含め、検討事項は多岐にわたるものと思われます。そのような中でいただいたご意見については、非常に重要な視点であると受け止めております。 また、磯崎新氏についてはご承知のとおり大分出身の建築家であり、昨年または一昨年には北九州市立美術館等で回顧展も開催されていたと記憶しております。私自身も見学に伺いましたが、磯崎建築は北九州にも多く存在しており、そうしたご縁や接点については今回初めて認識したものであり、大変貴重なお話であったと感じております。 直方のバーチャルミュージアムのホームページ運用されているのを時々拝見して、すごく参考にさせていただいていますけれど、今あのホームページってというのは、何か説明に不足があった時、加筆するとか、そういった情報更新とかってどういう風にされているのかなってという部分についてお尋ねしたいんですけど。

(事務局)	現在は、ご指摘をいただいた際などに内容の整理や修正を行っている状況ですが、新しい文化財や文化資源を追加して掲載する作業については、通常業務の中では十分に行えていないのが現状です。この点については、事務局としても課題であると認識しています。 一方で、美術館の収蔵品等についてもバーチャルミュージアム上に掲載しているところであり、今後さらに内容を充実させていきたいと考えています。この点については、担当者とも共有しており、今後の改善に向けて検討しているところです。 今後、掲載内容の充実や活用方法について、皆さまからのご意見やご助言をいただければと思います。
(会長)	ありがとうございます。現在そういった事務や管理を行われているのは、どちらがやられているのですか。
(事務局)	当課の社会教育係の方で、学芸員が中心となって行っております。
(会長)	ご説明については理解しました。可能であれば、バーチャルミュージアム等の情報について、関係者間でより密に意思疎通を図ることができる体制や、掲載情報を適宜更新していく仕組みが整うと、さらに良いのではないかと思います。 限られた人員や予算等の中で対応していく必要があることは理解していますが、文化財や地域資源に関する情報は、継続的に更新されていくことが望ましいと考えます。そのため、事務局から関係者に対して広く情報提供を呼びかける方法や、美術館・文化財担当・地域の関係団体などから情報が集まりやすくなる仕組みについても、今後検討していただければと思います。 バーチャルミュージアムや関連する情報発信をより有効に活用していくためには、どのような形で情報を収集・更新していくのがよいか、引き続き検討が必要であると感じます。
(事務局)	バーチャルミュージアムに掲載する内容については、皆さまから情報提供やご提案をいただけると大変ありがたいと考えています。 現在は、基本的に市が所蔵している資料や、市が把握している文化財を中心に掲載している状況です。そのため、本日ご意見をいただいたような、フットパスのルートや地域を巡るコースのような情報については、現時点では十分に掲載できていない部分があります。

(会長)	現在のシステムでは、個々の文化財を一対一で閲覧するような形が中心となっているため、複数の文化財や地域資源をつなげて見せる場合には、システム上の改善が必要になる可能性もあります。 しかし、例えば「このようなルートで巡ることができる」「この地域ではこうした文化資源をつなげて見ることができる」といった提案ができるようになれば、バーチャルミュージアムの活用の幅も広がると感じました。 本日のご意見を伺い、そうした見せ方や活用方法についても重要であると認識しましたので、今後、可能な範囲で反映できるよう検討していきたいと考えています。 ありがとうございます。やはり、バーチャルミュージアムの内容を充実させていくためには、地域で熱心に活動されている方々や、文化財担当、関係課、美術館など、さまざまな立場の方から情報や意見が集まるような仕組みが必要ではないかと感じました。 地域には、行政だけでは把握しきれない文化資源や活動が数多くあると思います。そのため、地域団体や関係機関との連携を深め、継続的に情報が共有される体制を整えることで、バーチャルミュージアムの内容や活用方法もより充実していくのではないかと思います。 具体的にどのような仕組みを作るべきかについては、すぐに明確な案があるわけではありませんが、今後の課題として検討していく必要があると考えます。
(委員)	私も今回初めてバーチャルミュージアムを確認しましたが、年表やコラムのような内容、また「直方の歴史」に関する項目などが掲載されており、内容自体は興味深いものだと感じました。 一方で、現在の仕組みでは、利用者側が自ら検索を行わないと情報にたどり着きにくい印象があります。 例えば、地図上に文化財や地域資源の位置が表示されており、利用者がその場所をクリックすると、関連する情報が自動的に表示されるような仕組みがあると、より直感的に利用しやすくなるのではないかと思います。 検索に慣れていない方や、具体的な文化財名を知らない方でも、地図を見ながら気になる場所を選ぶことで地域の歴史や文化資源に触れられるようになれば、バーチャルミュージアムの活用がさらに広がると考えます。

(委員)	地図表示に関連して、直方市のホームページ等を確認して感じたことですが、市内の場所の表記については、小学校区ごとに整理されているものが多い印象があります。 小学校区での表記は、地域の方にとって一定程度分かりやすい面もあると思いますが、一方で、近年は外国人住民も増えており、また子どもがいない世帯などの場合、自分がどの小学校区に属しているのか分からない方もいるのではないかと思います。 自分の住んでいる場所が市内のどの辺りかは分かっている、それがどの校区に当たるのかまでは分かりにくい場合があります。例えば、ごみ出しの日程などについても、東西どちらの区域に該当するのか迷うようなケースもあると思います。 そのため、校区名などの文字情報だけでなく、地図上で場所や区域を確認できるような表示があると、より多くの人にとって分かりやすくなるのではないかと感じました。バーチャルミュージアム等においても、地図を活用して文化財や地域資源の位置を示すことで、利用者が直感的に情報へアクセスしやすくなると思います。
(会長)	ご指摘ありがとうございます。 確かに今後の運用については、すぐに対応できるものばかりではない部分もありますが、介護や多言語対応なども含め、幅広い利用者への配慮が必要になってくるものと考えています。 また、先日外国人の方とのやり取りの中で、情報の見せ方について感じた点として、例えば海外の情報サイトでは都道府県の並び順がアルファベット順になっているなど、日本人の感覚とは異なる整理のされ方があることを実感しました。 このように、私たちが当然と考えている情報の並び方や表示方法にも一定のバイアスがある可能性があり、利用者の立場によって分かりやすさは異なるという点は重要な視点であると認識しています。 そのため、ユーザーインターフェースの設計においては、可能な範囲で多様な利用者の視点を取り入れながら改善していくことが必要であると考えます。 ありがとうございます。それでは他にご意見はいかがでしょうか。 時間の都合もございますので、最後に基本施策4-③「文化芸術×子育て・教育」について確認させていただきます。本項目については、前回の議論を踏まえ、特に子育て・教育分野との連携に関する追記部分を中心と

	なっております。 これまでのご意見としては、地域の文化資源をどのように掘り起こし、広く活用していくかという点や、単独の取組だけではなく他地域との連携や活動事例の共有の重要性、また学校・家庭・地域それぞれの役割分担の在り方など、多様な観点からご意見をいただいているところです。以上の点を踏まえた内容となっておりますが、この点について何か追加のご意見はございますか。
(委員)	なお、表記についての細かな点ですが、「子ども」の表記について一部漢字表記となっている箇所があるため、近年の一般的な表記に合わせ、ひらがな表記で統一するようお願いいたします。
(会長)	個人的な意見として申し上げますが、バーチャルミュージアムの在り方については、必ずしも国宝や重要文化財のような、いわゆる価値の高いものが中心でなければならないとは考えておりません。変な言い方に聞こえるかもしれませんが、私は、国宝や重要文化財があるから良いミュージアムであるとは必ずしも思っておりません。 例えば、東京国立博物館よりも、千葉にある国立歴史民俗博物館のように、地域の歴史や民俗を丁寧に扱い、それを分かりやすく伝えているミュージアムの方が、むしろ優れたミュージアムであると学生時代から感じていました。 したがって、遺品や文化財の価値の大小そのものに重きを置くのではなく、地域に存在する様々なものをどのように拾い上げ、それをどのように説明し、意味づけていくかという点の方が重要ではないかと考えています。 そのうえで、地域の文化資源を丁寧に掘り起こし、それを面白い・興味深いと感じてもらえるような形で提示していくことができれば、より良いミュージアムになるのではないかと考えております。
(委員)	先ほどの表記についてですが、「子どもたち」の「ども」の表記について、漢字とひらがなの違いはどのような考え方によるものなののでしょうか。時代や表記の考え方によって様々な扱いがあるものと承知していますが、例えば「障がい」の「害」の字を避けてひらがな表記とするような考え方と同様に、「子ども」の「ども」についても、最近はひらがなで表記することが一般的になっているという理解でよろしいでしょうか。

(委員)	そうですね。最近はそういった考え方が一般的になってきています。
(会長)	確かに、漢字で書いてもそこまで問題があるのかという気も正直しますが、ただ一方で、言葉によっては少しややこしい受け取られ方をする部分もあるのかなとも思いました。 そういう意味では、一般的な表記の流れに合わせるということであれば、それに従うのが無難かなということで、ご指摘として受け止めました。ありがとうございます。
(委員)	会長がおっしゃっていた「バーチャルミュージアムの紹介方法が重要である」という点についてですが、ここにお集まりの皆様はそれぞれ長年にわたり様々な活動をされており、地域の知識や記録を最も多くお持ちの方々だと思います。 そうした皆様の知見や経験を、文章やインタビューなどの形でしっかりと残し、それらを組み合わせて発信していくことは非常に意義のある取組だと考えます。また、こうした記録の蓄積と発信は早い段階から着手することで、その価値をより高めることができるものであり、バーチャルミュージアムの構築に向けた有効な出発点になるのではないかと感じております。
(会長)	ありがとうございます。ある種の肩書といいますか、特に長く郷土史に携わってこられた方や、石炭記念館の館長を務められていた方など、地域の歴史や文化に関わる様々な方々がおられます。 そういった方々が、ちょっくらじおに出演させていただいた際の音声など、録音として残っているものも含め、掘り起こしていけば様々なコンテンツがあるのではないかと考えます。そうしたものを活用しながら、少しずつコンテンツを充実させていくことができれば良いと感じたところです。 また、谷尾美術館の件についても、美術館のスタッフにお話しいただくなど、様々な形でコンテンツを増やしていくことができるのではないかと改めて感じました。こうした取組は前向きな話であり、大変良い方向性であると考えます。 皆さんありがとうございました。いただいたご意見については、今後の計画修正の参考とさせていただきたいと思います。一旦ここで、本日のメインテーマであります「文化芸術とまちづくり」について議論を進める前に、「五日市委員会」「直方市民劇場」の方をお迎えする準備がございます

(会長)	ので、5分間の休憩を取りたいと思います。 3. 議題（2）文化芸術×まちづくり お待たせいたしました。後半は「文化芸術×まちづくり」をテーマに進めてまいります。まちづくりという範囲が広いため、今回は文化施設が集積し、JR 直方駅や商店街などある直方市中心市街地に焦点を当てて議論を進めてまいります。 それに伴い、本日は日頃より商店街で活動されている五日市委員会の塩川様、直方市民劇場の脇坂様、高橋様、にお越しいただいております。お忙しい中、ご出席いただき誠にありがとうございます。また出席は叶いませんでしたが、同じく商店街で活動されている日本楽器工房様と本市の企画経営課より情報提供をいただいておりますので、そちらにつきましては、事務局より説明をいただければと思います。日頃より実際に商店街や中心市街地で活動されている方々からのご意見は、大変貴重なものだと感じております。 ぜひ本日は、日頃の活動についてご紹介いただくとともに、現場の視点からの率直なご意見もいただければと思います。 それではまず、事務局より「日本楽器工房様」と「企画経営課」より頂いております資料のご説明をお願いいたします。
(事務局)	日本楽器工房様からいただいた情報について、ご説明いたします。日本楽器工房様には、今回の審議会へのご出席はありませんが、商店街で事業を営みながら、音楽を通じた地域活動にも幅広く取り組まれている立場から、資料をご提供いただきました。 まず、「現在の取組と音楽・楽器文化について」です。日本楽器工房様は、吹奏楽で使用される楽器の修理や調整を専門とする事業者として、5年前に創業されています。こうした本業に加え、代表の岐部様は、鞍手高校吹奏楽部のOB会長や、飯塚市の小・中学生を対象とした吹奏楽クラブ「イイツカプラスアカデミー」の代表を務められています。また、今年から活動を始めた「直鞍のジュニアバンド設立を考える会」の発起人としても、地域子どもたちが音楽に親しみ、成長できる環境づくりに取り組まれています。その根底には、「地域の未来を担う子どもたちを育む環境は、責任ある大人たちがつくるべきである」という考えがあり、吹奏楽を通じた人と人とのつながりづくりや、地域の音楽文化を継続的に支える仕組みづくりを進められています。このほか、各種吹奏楽イベントや地域の文化交流事業にも積極的に参加し、音楽や楽器を通じた地域活性化に取り

組まれています。店舗については、筑豊地域をはじめ、北九州市や福岡市を中心に、九州・中国地方の各県から、プロ・アマチュアを問わず、延べ約3,000名の利用があるとのこと。この実績からも、音楽への関心や楽器を演奏したいという意欲を持つ方が、直方市内だけでなく、広い地域に存在していることが分かります。日本楽器工房様としても、地域における音楽文化には、まだ大きな広がりや可能性があると感じられているとのこと。

次に、「商店街で店舗を営む中で感じていること」についてです。岐部様は、約30年ぶりに関東からふるさとへ戻られた際、地域や商店街の現状に驚きや寂しさを感じる一方で、商店街には新たな可能性があると考え、出店を決意されたそうです。商店街の客足が減少していることについても、単に時代の変化によって人の流れが変わったというだけでなく、街としての魅力を新たに構築する機会として、前向きに捉えられています。実際に、日本楽器工房様では、新たな価値を生み出す取組によって、毎年約2割の着実な成長を実現されており、商店街においても魅力次第で発展できる可能性があると感じられています。来街者を増やし、商店街を活性化するためには、個々の取り組みに加え、商店街や街全体としてのコンセプトを明確にし、マーケティングやブランディングを通じて、まちの将来ビジョンを関係者全員が共有し、一体となって取り組むことで、直方市外や地域外からの来訪者をさらに増やすことができるのではないかと考えられています。

続いて、「音楽と商店街の活性化の可能性」についてです。日本楽器工房様からは、地方自治体にとって最も重要な財産は、そこに暮らす人々である、というご意見をいただいています。音楽や芸術を活用した取組についても、単発のイベントを開催して終わるのではなく、継続的な仕組みをつくる必要があるとされています。例えば、子どもたちが幼少期から成人するまで、学びの一環として、五日市などのイベントや街の賑わいづくりに継続的に関わることで、ふるさとへの愛着を育むことができるのではないかと、というご提案です。継続的な取り組みが人の流れを生み、地域に新たな賑わいをもたらすことができるので、各学校や教育委員会とも連携して実践していくべきであり、こうした経験を重ねた子どもたちは、将来、進学や就職などで地域を離れることがあったとしても、「直方をより良くしたい」という思いを持ち続け、将来的に地域の未来を支える大切な人材になっていくのではないかと、という考えです。

最後に、「今後の連携や可能性、意見・要望」についてです。現在、人々の生活圏は直方市に留まらず、近隣地域と広域的なつながりの中で営ま

れており、今後の計画や施策を実行する際には、近隣地域とのつながりを意識した広い視点を持つ必要がある、というご意見です。広域的な音楽・文化活動を実施することができれば、直方市民だけでなく、近隣地域の子どもたちにも、社会性や主体性を育み、自分自身の可能性を広げる機会を提供できます。

また、そうした活動を継続することで、地域の枠を越えて活躍する人材や、複数の地域を横断して活性化に取り組む仕組みを生み出すことにもつながると考えられています。直方市がこれまで培ってきた人材や施設、歴史、文化、商店街など、さまざまな地域資源を生かした施策として進めなければ、次の時代につながる文化や環境を築くことは難しいのではないか、というご意見をいただいています。

以上を踏まえ、日本楽器工房様からは、文化芸術に関する計画や施策について、単年度や一定期間のみの取組として考えるのではなく、長期的かつ広域的な視点を持ち、民間団体をはじめとしたさまざまな関係者と連携しながら進める必要がある、というご意見をいただいております。日本楽器工房様からの情報提供については、以上です。

引き続き、本市の企画経営課からいただいた情報について、簡潔に説明します。

まず、JR 直方駅西側 SL 広場整備事業の概要についてです。この事業は、人口減少などによる中心市街地の活力低下や、市内の歴史・文化資源が点在し、回遊につながりにくいという課題を踏まえ、駅西側エリアを再構築するものです。具体的には、旧いこいの村に保存されている SL を移設・展示し、人工芝を敷設した「SL 広場」を整備する予定です。あわせて、ユメニティのおがたの音響・照明設備等の高機能化や、図書館への飲食・会話が可能な機能の導入など、周辺施設を含めた一体的な整備が予定されています。整備後は、SL 広場や図書館、ユメニティのおがたなどと、市内の歴史・文化資源を結び付け、「直方まち歩き」などの着地型観光の拠点として活用し、駅東側の商店街への誘導も含めて、中心市街地の賑わい創出につなげていくことが目的とされています。

次に事業を通じて期待される効果についてです。再整備される図書館、改修されるユメニティのおがた、そして SL 広場を核として、新たな人の流れを生み出すことが期待されています。その流れを商店街や観光スポットへつなげることで、エリア全体の回遊性向上や、来訪者による消費の増加につなげていくという考えです。また、「直方まち歩き」や「のおがたイルミ」の駅西側エリアへの拡充などにより、交流人口や関係人口の拡大も期待されています。さらに、地元 NPO などと連携した市民参加型の

	「SL お掃除会」により、市民が地域資源に関わる機会をつくり、地域への愛着や誇りの醸成にもつなげていくことが考えられています。 次に文化芸術・文化資源との関わりについてです。直方市には、石炭記念館や市内に点在する7台のSL、レトロ建築など、近代化産業遺産が多く存在しています。これらは、これまで個別の「点」として活用されることが多かったものの、今後はSL広場を起点としたまち歩きコースや、観光協会と連携した周遊型バスツアーなどにより、それぞれを結び付けた「面」としての観光・文化コンテンツへ発展させることが可能であるとされています。また、JR九州直方機関区との共同イベントや、まちなかウォーキングとの連携など、多様な主体が連携することで、歴史・文化資源を活かした新たなまちづくりの展開が期待されています。 最後に、企画経営課から見た文化芸術・文化資源の可能性や意見・要望についてです。歴史遺産や文化資源については、単に保存するだけでなく、外部からの需要を取り込みながら、「稼ぐ力」を持つ地域資源として活用していく視点も重要であるとの意見です。そのためには、民間のノウハウを活用し、資源の活用によって得られた収益を、維持管理や文化振興に還元する仕組みづくりも必要であるとされています。また、文化芸術を文化分野だけで完結させず、観光振興や回遊性向上などのまちづくり施策と分野横断的に連携させることで、より大きな波及効果が期待できるという内容です。 こうした取組を通して、市民の郷土への愛着や誇り、いわゆるシビックプライドの醸成にもつなげていくことが重要である、というご意見をいただいています。 長くなりましたが、以上になります。
(会長)	ありがとうございました。ただいまのご説明は、基本的には情報提供という位置づけであるため、質疑応答という形では少し難しい部分もあるかと思います。そのうえで、今ご説明いただいた内容について、ご意見やご感想等がございましたらお願いいたします。 それでは、お願いいたします。
(委員)	日本楽器工房さんにはお会いできず、本当に残念に思っていますが、音楽に関わる分野として非常に興味深く拝見しました。 資料の裏面にも、「人々の生活圏は直方市にとどまらず、近隣の地域にも広がっている」という趣旨の記載がありましたが、その点はそのとおりだと思います。

(会長)	例えば、音楽に関する取組を日本楽器工房さんだけで進めようとする、どうしてもその範囲でできることに限られる部分があるかもしれません。しかし、近隣地域の関係者や事業者と連携することで、より多様な取組や実現の可能性が広がるのではないかと感じました。 具体的に思い浮かんだ例として、直方市の近い地域で言えば八幡西区になりますが、松尾古楽器工房さんという工房があります。私自身も個人的に知り合いですが、非常に古い楽器の修復や製作をされている方です。 本来であれば、東京など遠方からでも見に来たいと思う方がいるような貴重な取組をされているのですが、ご本人がやや控えめな方でもあり、なかなか見学等が実現しにくい面もあります。 しかし、そうした活動こそ、どこかで広く公開され、多くの方が見ることができれば、地域の方にとっても非常に貴重な経験になると思います。また、市外から人を呼び込むという意味でも、大きな魅力やアピールにつながるのではないかと考えます。 私の知人の中にも、松尾古楽器工房さんを見に行きたいという方が多くいますが、なかなか実現していない状況があります。 例えば、1 か月や 2 か月といった一定期間、地域の楽器工房と連携して、音楽に関するイベントや展示、創作的な取組を行うことも考えられるのではないのでしょうか。 音楽、美術、演劇など、文化芸術には様々な分野がありますので、それらを毎年または数年ごとに分野を変えながら実施していく方法もあると思います。芸術祭のような形を含め、いろいろな展開の仕方が考えられるのではないかと感じました。 今回の資料を拝見し、直方市内の資源だけでなく、近隣地域の文化芸術資源も活かしながら、連携して取り組んでいくことを検討してもよいのではないかと思います。 ありがとうございます。前回の議論でも同様の趣旨があったかと思いますが、直方市だけで文化芸術に関する取組をすべて自給自足的に行っていくことは、なかなか難しい面もあるのではないかと感じています。そのため、市内にある様々な文化資源を発掘し、活用していくことはもちろん重要ですが、それに加えて、近隣地域で行われている様々な活動や、周辺地域に存在する文化芸術資源とも連携していくことが必要ではないかと思っています。 今回のご意見については、直方市内の資源を大切にしながらも、市外・近隣地域とのつながりも視野に入れ、より広域的な連携の在り方を模索
------	---

(委員)	していくべきではないか、という趣旨のご意見として受け止めました。ありがとうございます。 問題提起というほどのことではありませんが、日本楽器工房さんについて感じていることを申し上げます。日本楽器工房さんは、まちを歩いていると一角にガラス張りの、とても洒落た雰囲気建物として目に入ります。外からも店内の様子が見える造りになっており、まだご主人と直接お話ししたことはありませんが、直方の中でも非常に雰囲気のある店舗だと感じています。通るたびに、どこかパリの街角にあるお店のような、洒落た雰囲気があると感じており、楽器を演奏するわけではありませんが、外から見ているだけでも魅力を感じています。 そのような意味でも、日本楽器工房さんは、音楽や楽器に関する文化資源であると同時に、まちの景観や雰囲気づくりの面でも魅力のある存在ではないかと思います。
(会長)	ありがとうございます。直方では、商店街を歩いていると、室内楽の演奏会などが定期的に行われている様子も見受けられます。そうした取組と、先ほどご意見のあった地域の楽器工房や近隣の文化芸術資源との連携がうまく図られると、より広がりのある取組につながるのではないかと感じました。商店街で行われている音楽活動や、楽器工房のような専門性を持つ地域資源が連携することで、まちなかで文化芸術に触れる機会を増やすことができるのではないかと思います。 本日のご意見については、可能であれば日本楽器工房さんにもお伝えいただければと思います。ありがとうございます。 それでは、時間の都合もございますので、続いて五日市委員会の塩川様および直方市民劇場の脇坂様からお話を伺いたいと思います。 まずは、塩川様からご説明をお願いいたします。よろしくお願いいたします。
(五日市委員会)	よろしくお願いいたします。本日は、五日市委員会の塩川として参加させていただきました。 今回の会議にあたり、五日市委員会内で、誰がこの場に参加し、説明を行うかについて話し合いを行いました。なかなか調整がまとまらず、回答用紙についても最終的に提出できないままとなってしまいました。まずは、その点についてお詫び申し上げます。 本日は、主に4点についてお話しさせていただきます。1点目は現在の

	取組の紹介、2点目は活動を通じて感じている手応えと課題、3点目は中心市街地・商店街で活動を行う意義、4点目は今後の連携や可能性についてです。 まず、現在の取組についてご説明します。皆さんからは「五日市実行委員会」と言われることもありますが、正式名称は「五日市委員会」です。“実行委員会”ではなく、実行するのは商店街の店舗の方々や、露店として出店してくださっている方々です。我々五日市委員会は、それらの取組がうまく進むように調整を行う役割を担っています。言い換えれば、「五日市調整委員会」のような存在であると言えるかもしれません。 現在の組織体制としては、会長1名、副会長1名、会計1名、監査2名、その他委員という形で構成されています。 そもそも五日市の始まりについて、皆さんはご存じでしょうか。おそらく、詳しくご存じの方はあまり多くないかと思います。 五日市は昭和34年から始まった取組です。もともとは、多賀神社の下にある神社へ、毎月5日に多くの方がお参りに来ていたことがきっかけでした。多くの参拝者が集まるのであれば、その場で商売をすればよいのではないかという発想から始まったものです。 その後、五日市が始まりましたが、直方の商店街には昔から飲食店が少ないと言われていました。そのような中で、昭和41年3月から「五日市うどん」が開始されました。 また、皆さんは五日市が一度なくなるという話があったことをご存じでしょうか。 2022年11月5日に加盟店の皆さんへ通知があり、五日市が経営破綻のような形で継続できなくなるという話が出ました。その後、会議を重ね、我々が新しい委員会として引き継ぐことになりました。引き継ぐにあたっては、費用面を見直し、高いものについては削っていきました。ただし、五日市の伝統として一番最初に始まったお参り、そしてうどん、花火だけは必要だということで、現在も続けています。 ただ、花火については、コロナ禍以降、花火業者の方から、12発だけのために来て打ち上げることは難しいということで断られてしまい、現在は実施できていない状況です。 一方で、朝のお参りについては、現在も必ず行っています。また、五日市うどんの催しも実施しています。五日市委員会として直接運営しているものは、実際にはこの2つだけです。その他については、我々は調整を行う立場であり、店舗の方々がそれぞれ頑張って五日市を運営してくださっています。
--	--

次に、活動を通じて感じている手応えと課題についてです。直方の商店街と聞くと、皆さんはおそらく五日市を思い浮かべると思います。逆に、五日市がない日の直方の商店街を歩いたことがあるでしょうか。端から端まで見渡せるほど人通りが少なく、何もないように感じてしまう状況があります。そのため、五日市を続けてきてよかったと感じています。商店街の中で店舗の方々と話す機会も増えてきましたが、店舗の方々からも「五日市だけでやっていける」という声を聞くことがあります。五日市は、毎月5日に必ず開催する定期イベントとして、地域に染みついているものだと思います。来てくださる方も、「今日は五日市だから商店街に行こう」という感覚を持ってくださっているのではないかと思います。

その一方で、もう一つイベントを作りたいと考え、昨年7月から始めたのが「直方夜市」です。夜にも商店街でイベントを行う取組として、第2土曜日に開催しています。全ての商店街で開催することは難しいため、まずは古町商店街から始めています。このイベントも毎月必ず開催しており、最近はずりづつ認知度が上がってきたと感じています。来場者が少ない時には、開催するだけでもよいのではないかなと思う時もありますが、それでも続けてきてよかったと感じています。

直方夜市は、来月7月で1周年を迎えます。今後も継続していき、直方には五日市と夜市という2つのイベントがあると言われるようにしていきたいと考えています。

次に課題についてです。これは少し難しい問題ですが、商店街というものについて、皆さんの感覚では、店先に商品が並び、服が掛かっていたり、物販が行われていたりする景色が当然のものとしてあると思います。しかし、実際には商店街は道路です。私道ではありますが、道路上で何かを行っているという見方をすれば、法的には問題がある部分も出てきます。昔は当たり前に行われていたことでも、現在はスマートフォン等で誰でも簡単に法律やルールを調べることができます。そのため、「これはだめなのではないか」「あれも問題なのではないか」と言われることがあります。言われてしまうと、確かに法的には問題がある面もあります。しかし一方で、「商店街とはそういうものではないか」という思いもあります。ただ、それを正面から言うことは難しく、ここが一番難しいところです。

商店街が、もう少し自由に使える私道であってほしいという思いがあります。法的な問題を厳密に考えると、昔はできていたことでも、現在の法律をしっかりと守ろうとすれば、五日市は開催できないということになります。これは非常に難しい課題です。ただ、五日市がなくなった場合に商店街がどうなるのかという点も、同じくらい重要な問題です。

また、商店街の方々の意識についても課題があります。正直に申し上げると、現在商店街に住まれている方の中には、既に十分に商売をされてきて、今後積極的に商売をしていこうという気持ちがありません。しかし、商店街という名前である以上、商売をする場所であってほしいと私は思っています。

今後 10 年、20 年が経過すると、当然ながら代替わりが進んでいきます。その時に、空き家にせず、どのように活用していくのかが大きな課題になると思っています。商店街の方々のやる気をどう引き出していくのかという点も重要です。

さらに、人手不足の問題もあります。昔は、商店街の各店舗の方々が順番に五日市を運営していました。しかし現在は、子どもさんたちが商店街を離れ、戻ってきていない状況も多くあります。また、一人で店舗を回している方が多いため、五日市の運営に出ると店を開けられなくなってしまいます。そのため、現在は商店街に店舗を持っていない人たちも集まり、五日市を支える形で運営しています。

次に、中心市街地・商店街で活動を行う意義についてです。これは私自身の感覚や気持ちになりますが、私は商店街がとても好きです。魅力を感じています。直方駅を出てすぐの場所に、あれほど長いアーケードの商店街があるというのは、なかなかないことだと思います。

だからこそ、これをどう活かすか、非常にもったいないという思いで活動しています。

また、高校生を取り込みたいという思いもあります。直方には高校が多くあり、高校生は必ず直方駅に集まります。商店街のすぐ横を通って駅まで向かっているにもかかわらず、商店街の中に入ってくる高校生はほとんどいません。もし高校生を商店街に取り込むことができれば、それだけでも人の流れは大きく変わるのではないかと思います。高校生が来れば、さらに人が集まる可能性もあると思っています。どうすれば高校生が商店街に入ってきてくれるのか、現在考えているところです。

最後に、今後の連携や可能性についてです。五日市は、次回 7 月の開催で 808 回目を迎えます。年数にして 67 年です。67 年間、毎月 5 日に必ず開催しており、一度も休んだことがないイベントです。文献によると、昭和のある年に台風が直撃したことがあったそうです。その時ですら、無理やり開催したと記録に残っています。ただし、人は誰も来なかったそうです。その日はお盆前の 8 月 5 日で、台風直撃の中で開催したものの来場者がなく、仕入れた商品が大量に余ってしまいました。その対応として、翌月 9 月 5 日の開催時にチラシを大量に打ったところ、大盛況とな

(会長)	りました。それ以降、五日市のチラシが出るようになったと聞いています。 現在は、チラシの印刷などにはなかなか経費をかけられないため、SNS 等での発信を行っています。今後の一番の課題は広告・広報です。67 年も続いているイベントですので、「五日市委員会がやっている」「商店街がやっている」というだけではなく、私としては「直方市がやっている」と言ってもよいくらいのイベントではないかと思っています。もちろん運営しているのは五日市委員会ですが、直方市にも、もう少し自分たちのイベントとして捉えてほしいという思いがあります。現在、五日市には Instagram や LINE もありますが、直方市からの投稿や発信はほとんどありません。少しでも市として広報に協力していただけるとありがたいと思っています。 今後の連携については、直方市ともより連携していきたいと考えています。以上、五日市委員会からの説明でした。ありがとうございました。
(直方市民劇場)	ありがとうございました。まずは一通りご説明をいただいた後に、改めて意見交換を行う形で進めたいと思いますが、よろしいでしょうか。それでは引き続きまして、直方市民劇場の協坂様からご説明をお願いいたします。 直方市民劇場の事務局の協坂と申します。隣におりますのが役員の高橋です。本日はよろしく願いいたします。先ほど、五日市委員会の方から、順を追って取組や課題について丁寧にご説明がありました。私からは、限られた時間ではありますが、直方市民劇場の概要と、事前に提出した資料の内容を中心にお話しさせていただきます。 まず、直方市において昨年 9 月に文化芸術振興条例が施行されたことについては、私ども直方市民劇場の中でも当時、大きな話題となっていました。 本日は、この文化芸術審議会において、私ども直方市民劇場の活動や、商店街・地域との関わりについてお話しする機会をいただき、大変ありがたいと思っております。 市民劇場の歴史の中でも、行政の関係者の方々が事務局にお越しになったり、このような文化についての話し合いの場にお声がけいただいたりすることは、これまでほとんどありませんでした。そのため、本当にこのような日が来るとは思っておらず、大変うれしく感じております。ありがとうございます。

	まず、市民劇場とは一体何かという点からご説明します。 市民劇場は、全国的には「演劇鑑賞会」とも呼ばれており、市民が自主的に運営する会員制の演劇鑑賞団体です。全国各地に同様の組織があり、2025年4月現在、全国に107団体、約8万5,000人の会員が活動しています。この活動は、1949年に大阪で誕生しました。会員自らが会費を出し合い、優れた舞台芸術を継続して地域で鑑賞していくことを目的として発展してきた活動です。会員制による継続的な鑑賞活動や、「サークル」と呼ばれる会員グループを基礎とした運営の仕組みは、世界的にも珍しいものであり、日本独自の文化活動として受け継がれてきました。市民劇場は、単に演劇を見るだけの団体ではありません。会員同士が世代や職業を超えて交流し、共に運営し、共に学び合うことで、人と人とのつながりを育み、地域に文化を根付かせていくことを大切にしています。 その中で、直方市民劇場は、2000年2月にユメニティのおがたの開館とほぼ同時期に設立されました。ユメニティのおがたは2000年3月に開館したと聞いており、その前月に直方市民劇場が発足したことになります。2026年5月現在、直方市民劇場には828名の会員がおり、その中に197のグループがあります。会員は直方市内だけでなく、宮若市、中間市、鞍手町、北九州市など周辺地域にも広がっており、地域の文化拠点の一つとして活動を続けています。設立以来、現在までに160回の「例会」と呼ばれる演劇鑑賞会を開催してきました。これまでに、劇団民藝、文学座、俳優座、無名塾、こまつ座、青年座、前進座といった日本を代表する劇団を直方に迎えてきました。また、俳優としても、杉村春子さん、西田敏行さん、中谷達也さん、栗原小巻さん、長岡輝子さん、篠田三郎さん、最近では松下洸平さん、また元ジャニーズ事務所に所属されていた岡本健一さんなど、さまざまな方々が直方の舞台に立たれています。地方に住みながら、全国トップレベルの舞台芸術を鑑賞できる環境を、26年間、市民の皆さんの力で守り続けてきたことは、私たちにとって大きな財産であると感じています。 市民劇場の大きな特徴は、会員制であること、そして会員自身が運営に関わるという点にあります。直方市民劇場では、年に6回、ユメニティのおがたで鑑賞の場を設けています。会員は年に一度は、芝居の運営スタッフとして関わります。例会までのおおよそ4か月の間に、ポスターの掲示、チケットの準備、座席シールの準備、劇団との打ち合わせ、当日の受付や座席案内、劇団との交流など、多くの準備を会員が担っています。そのため、例会ごとに5回から6回ほど、昼と夜に同じ内容の会議を行い、事務局に会員が集まって話し合いを重ねています。医療関係者、福祉関係
--	--

者、学校の先生、会社員、自営業の方、学生、主婦、退職された方々など、さまざまな世代や職業の方々が、同じ目的に向かって協力する中で、新しいつながりや信頼関係が生まれています。私たちは、このように人が集い、活動していくこと自体が、市民同士のコミュニティづくりにつながっていると感じています。

その活動の拠点となっているのが、商店街にある事務局です。事務局は、単なる事務所ではありません。会員が会費を納めに来たり、例会の準備をしたり、お茶を飲みながら演劇の話や日常生活の話をしたりするなど、人が自然に集まる場所にもなっています。商店街という立地だからこそ、事務局へ来た会員が買い物をしたり、食事をしたりする機会も生まれています。また、店頭に掲示したポスターを見て、「次はどんな芝居が来るのですか」と声をかけられることも少なくありません。東京から来られる劇団の皆さんや、他の市町村の市民劇場の仲間たちが直方に来られた際にも、直方の商店街やまちの魅力を知っていただくきっかけになっています。

さらに、商店街の皆さんとの日常的な交流の中では、防犯に関することや、今日のような悪天候の際に「気をつけた方がいいよ」「早めにシャッターを閉めた方がいいのではないか」「こういう予報が出ているよ」といった情報共有など、さまざまな場面で支えていただいています。商店街の方々の声が、商店街の中に響き合うということも、とても魅力的なことだと思っています。

また、芝居の例会当日には、劇団へのお弁当や飲み物の差し入れ、当日に使用する文房具やコピー用紙など、必要なものを商店街内で揃えることができます。本当に助かっており、私たちの活動は多くの商店街の皆さんに支えられて成り立っていると感じています。

近年では、芝居の例会だけでなく、地域との連携にも力を入れています。例えば、地域団体や劇団による能楽の公演、一人芝居、戦争と平和をテーマにした子どもたちを招待する舞台の実行委員会、シネマ・映画、ドキュメンタリー映画の上映会など、市民劇場以外の皆さんとも協力しながら文化事業を開催してきました。また、五日市においても、直方市民劇場は協賛加盟店となっており、軒下市なども行っています。五日市の名物となったチンドン屋さんや三味線の演奏などにも、会員が関わっています。

このように、演劇という枠を超えて、地域の文化活動を支えていく役割も少しずつ広がってきています。今後は、さらに商店街や行政の皆さんと連携し、新しい取組にも挑戦していきたいと考えています。資料にも記載

しておりますが、例えば商店街の空き店舗を活用した朗読教室、読書会、台本を読む会などの文化活動、市民劇場が招く劇団や俳優によるワークショップなどを開催できればと考えています。そのような取組ができれば、子どもから高齢者まで幅広い世代が集う新たな交流の場になるのではないかと思います。

また、市民劇場には会員証のようなものとして、会員手帳があります。こうしたものを活用し、商店街でのサービスやスタンプラリーなどを実施できれば、会員がより商店街や直方市内を利用するきっかけになるのではないかと思います。こうした取組は、回遊性やにぎわいの創出にもつながっていくと考えています。

市民劇場の会員は、会費の納入や例会の準備などで、年間を通じて何度も商店街を訪れています。この「定期的に人が集まる」という強みを、商店街やまちづくりの活性化につなげていくことができれば、大きな可能性があると感じています。また、直方市の健康ポイント制度についても知る機会があり、役員の中からも、市民劇場として何か関わることはできないかという声が上がっています。

ただし、こうした取組は、市民劇場だけで実現できるものではないと考えています。商店街の皆さん、行政の皆さん、地域で活動されているさまざまな団体の皆さんと知恵を出し合い、それぞれの強みを生かしながら進めていくことが大切ではないかと思っています。

また、先ほど五日市委員会の方から課題についてお話がありましたが、私たちも明治町の通りに事務局を構えており、商店街の方々と話す中で感じることがあります。やはり、後継者について、引き継いでくれる人がいないという声は多く聞こえてきます。また、情報発信についても、ホームページを作りたい、SNS を使ってみたいけれど、やり方が分からないという声があります。専門の会社に問い合わせても、費用が高額で、自分のお店だけで十分に情報発信を行うことが難しいと感じている方もいらっしゃるようです。そうした情報発信の課題について話されている方がいたことを、先ほどのお話を伺いながら思い出したので、併せてお伝えします。

最後になりますが、私たち直方市民劇場が26年間活動を続けてこれたのは、会員の皆様をはじめ、行政の方々、商店街、地域の皆様のご理解とご支援があったからだと思っています。そして、これからも私たちは、演劇を見る文化にとどまるのではなく、このまちで人と人をつなぎ、地域をつなぐ文化として育てていきたいと考えています。「演劇のあるまち・直方」が、直方の魅力の一つとしてさらに発展していくよう、これか

(会長)	らも皆様とともに歩んでいきたいと思っています。本日の残りの時間の中で、直方市民劇場が今後どのようなことに関わることができるのか、またどのような構想が可能なのかについて、皆様と考える時間にしていただければと思います。よろしくお願いいたします。以上です。 ありがとうございました。それでは、これから「文化芸術とまちづくりの連携」という観点から、ぜひ忌憚なく意見交換をさせていただければと思います。ただいま、五日市委員会および直方市民劇場の皆様からご説明をいただきました。また、先ほど事務局からは、日本楽器工房様および直方市企画経営課からの情報提供についてもご説明をいただいております。これらを踏まえ、改めて中心市街地をテーマに、文化芸術とどのように連携・協働しながら取組を進めていくことができるのか、その可能性について、皆様からご意見をいただければと思います。主な論点として、事務局からお示しいただいている内容をいくつか申し上げます。まず、中心市街地にある空き店舗、文化施設、文化資源をどのように活用していくのかという点です。次に、商店街や地域団体との連携をどのように進めていくのかという点です。さらに、文化芸術を通じて、先ほどからもお話に出ています回遊性やにぎわいをどのように創出していくことができるのかという点も重要な論点になるかと思っています。 また、先ほど直方市民劇場の方からもお話がありましたように、文化というものが単独で存在しているのではなく、市民の皆様が日常的に文化芸術に触れることができる仕組みを、どのように作っていくのかということも考えられると思います。 これらはあくまで事務局から提示いただいた論点案であり、当然ながらこれに限るものではありません。ぜひ皆様から自由にご意見をいただければと思います。時間の許す限り、忌憚なくご意見をいただければと思いますので、どなたからでも結構です。
(委員)	ありがとうございました。大変興味深くお話を伺いました。 まず、お二方からもご意見が出ていたと思いますが、市としてできることとして、私が一番に思い浮かぶのは広報の部分です。市内の方々に向けてはもちろん、市外の方、さらには国外の方に向けて、直方市内でどのような活動が行われているのかを、どのように広げていくのが重要ではないかと感じました。 これまでも、直方市内では様々な取組や活動が行われてきたと思いますが、それが十分に伝わっていない部分もあるのではないかと思います。

(委員)	そうした活動を、広報によって見える形にしていくことができないかと考えました。 先ほどバーチャルミュージアムの議論の中では、地図を活用して情報を見せる方法もあるのではないかという話をしましたが、今回のお話を伺うと、カレンダーを活用した情報発信も有効ではないかと思います。 例えば、直方市民劇場については年間を通じた例会の予定がありますし、五日市は毎月5日に開催されています。また、夜市についても毎月第2土曜日に開催されているとのことでした。このように、市内では定期的に様々な文化芸術活動やイベントが行われていますので、それらをカレンダー上で一覧できるようにし、いつ、どこで、どのような活動が行われているのかを検索できる仕組みがあるとよいのではないかと思います。 まずは、そうした情報を整理し、市民や来訪者が分かりやすくアクセスできるようにすることが重要ではないかと感じています。 五日市委員会の皆様には、ぜひこれからも五日市を長く続けていただき、いずれはギネスブックに載るくらいの取組として継続していただきたいと思います。 私自身、子どもの頃から五日市には慣れ親しんできました。昔の五日市は、歩くのも大変なほど混み合っており、自転車を押して通ることも難しいような状況でした。肩と肩が触れ合うような中で、商店街の中を歩いていた時代があり、その頃のにぎわいを懐かしく思い出しました。 現在は、商店街の方々の高齢化や後継者不足といった大きな課題があると思います。また、商店街の中に実際に住んでいる方がどれほどいらっしゃるのか、ご自宅は別の場所にあり店舗だけが商店街にあるのか、あるいは店舗を貸して別の方が営業されているのかなど、地域の状況も変化しているのではないかと感じます。そうした中で、若い方々が五日市を引き継ぎ、つないでいこうとされていることを大変うれしく思います。 ぜひ、これからも五日市を継続していただきたいです。そして、観光協会とも連携しながら、行政としても、まちおこしのために一生懸命活動されている方々をしっかりと応援していただきたいと思います。よろしくお願いいたします。
(会長)	ありがとうございます。ただいまのご意見の中で、商店街の現状として、店舗を閉じられている方がどのような形で商店街と関わっておられるのか、また実際に商店街に住んでおられる方がどの程度いらっしゃる

	のかという点についてお話がありました。 例えば、現在商店街の中でお店を閉じておられる方のうち、どれくらいの方がその場所に住んでおられるのか、あるいは店舗だけを所有されていて別の場所にお住まいなのかといった実態について、何かデータや把握されている情報があれば、可能な範囲で教えていただけますでしょうか。
(五日市委員会)	現時点で、商店街に実際に住んでいる方の割合などについて、具体的な情報は持ち合わせていません。 ただ、空き店舗の中には、1階の店舗部分はシャッターがずっと閉まっているものの、2階には電気がついており、実際に住まれている方が結構いらっしゃいます。そのような場合、1階部分についても、外から見ると空き店舗のように見えますが、所有者ご本人が2階に住んでいるため、「1階は貸したくない」という方も多くいらっしゃいます。空き店舗の調査については、現在、商工観光課の方で行われているのではないかと思います。
(会長)	この点については、事務局からお願いいたします。
(事務局)	詳細な数字については、現時点で手元にありませんが、商店街の空き店舗の状況や、空き店舗の貸出しに関するマッチングについては、商工観光課で取り組まれています。先ほどのお話にもありましたように、実際には空き店舗であっても、所有者が貸したくない、あるいは賃貸に出していないというケースが一定数あると聞いています。 空き店舗自体はかなりの数があるものの、貸し手と借り手のマッチングがなかなか進まないため、商店街の中で新たなお店が入りにくいというのが現状です。 また、商店街の中で飲食店を開きたいという要望は比較的多くあると聞いています。一方で、店舗の所有者側からすると、飲食店はリスクが高いと感じられることも多く、飲食店として貸し出すことにハードルを感じているオーナーも多いようです。 にぎわいづくりの観点からは、飲食店があることは重要であり、商工観光課としてもその必要性は認識されているようですが、実際にはなかなか進んでいない状況です。空き店舗が何店舗あるかといった具体的な数字については把握されていると思いますが、本日はその資料を持ち合わせていないため、次回以降、確認のうえお伝えできればと思います。

(委員)	今のご説明に関連して申し上げます。人を呼び込むという意味では、商店街に飲食店があることは本来とても理想的だと思います。ただ、先ほどのお話のように、飲食店として店舗を貸し出すことにはリスクやハードルがあり、なかなか実現が難しい面もあると思います。 その場合の別の方法として、例えば大学等と連携し、学生が運営に関わる店舗や企画を空き店舗で実施するような取組も考えられるのではないのでしょうか。 実際に、他地域の商店街や空き家活用の事例では、学生が店舗運営やイベントのマネジメントに関わるような取組もあると思います。直方の場合、高校生を商店街に取り込みたいというお話もありましたので、高校生が生き生きと活動できるような企画や、若い世代が主体的に関われる仕組みを考えることができれば、商店街のにぎわいづくりにもつながるのではないかと思います。
(会長)	ありがとうございます。先ほど、商店街に高校生がもう少し来てくれるとよいというお話があったかと思います。その点に関連して、商店街への来街促進だけでなく、情報発信という面でも、高校生など若い世代に関わってもらう方法があるのではないかと感じました。 例えば、商店街の魅力やイベント情報について、高校生の視点で発信してもらうことができれば、同世代に届きやすい情報発信につながる可能性があります。また、若い世代が商店街に関わるきっかけにもなるのではないかと思います。 商店街のにぎわいづくりと情報発信の両面において、高校生をはじめとした若い世代との連携を検討する余地があるのではないかと受け止めました。
(直方市民劇場)	高校生に関する点については、先ほどもお話がありましたが、実際に見ていても、中高生は商店街の中を通らず、商店街の外側を通して駅へ向かっている状況があります。これは非常にもったいないことだと感じています。私どもとしても、次世代を担う中高生や若い方々にも市民劇場の会員になっていただきたいという思いがあり、現在も会員拡大に向けた取組を続けています。しかし、なかなか若い世代に情報が届いていないというのが現状です。もし中高生が商店街の中を通ってくれるだけでも、ポスターを目にしたり、パンフレットを手にとったりする機会が生まれます。そうした接点が増えれば、若い方々にも市民劇場の活動や商店街で行わ

(委員)	れている文化活動が少しずつ広がっていくのではないかと思います。 先ほどご提案があったように、学生が運営する店舗や、若い世代が関わる企画などが商店街の中にあれば、中高生の人の流れも変わってくるのではないかと感じました。そのような取組については、ぜひ実現に向けて検討していただきたいと思います。 直方市民劇場の取組に関連して申し上げます。現在の学生や若い世代の感覚からすると、「会員制」という仕組みは、少し重たく感じられる部分があるのではないかと思います。もちろん、継続的に舞台芸術を支えていくうえで会員制は大切な仕組みだと思いますが、若い世代にまず足を運んでもらうことを考えると、最初から会員になることを求めるのではなく、一回きりでも参加できる入口を設けることが重要ではないかと感じました。 例えば、学生については 500 円や 1,000 円など、参加しやすい料金で一度観劇してもらい、「まずは行ってみよう」と思えるようなきっかけをつくるのが有効ではないかと思います。若い世代にとって、最初の一步のハードルを下げることで、市民劇場や演劇に触れる機会が広がっていくのではないかと考えます。
(直方市民劇場)	ありがとうございます。まずはお試しとして、一回だけ見せてもらえないか、あるいはチケット制のような形も併用した方がよいのではないかとこのご意見は、これまでもいただくことがありました。 直方市民劇場は会員制で運営している団体ですが、現在の時代の流れや社会情勢などを考えると、いろいろなことに挑戦していきたいという思いはあります。そのため、いただいたご意見についても、役員会などで話し合いながら考えているところです。 ただし、チケット制にしまうと、作品によって来場者数に大きな差が出るという課題があります。ある作品の時には非常に多くの方が来てくださる一方で、次の作品では来場者が大きく減るということも考えられます。そうすると、組織の財源が不安定になるため、その点については慎重に考える必要があると感じています。 一方で、先ほどおっしゃっていただいたように、子どもたちや学生の皆さんは、これからの未来をつくっていく世代でもあります。そうした子どもたちに対して、何らかのアプローチや取組ができないかということは、市民劇場としても考えています。 数年前には、鞍手高校の先生からご提案をいただいたことがありまし

(委員)	た。その先生は夜間部に勤めておられ、夜間部の学生はカリキュラムの関係などもあり、文化芸術に触れる機会が少ないというお話でした。学校現場でも、学校公演などを実施することが難しくなっている中で、何とか文化芸術に触れる機会を持てないかというご相談をいただきました。 その後、相談を重ね、当時の鞍手高校夜間部の学生の皆さんには、一年間会員になっていただき、演劇を鑑賞していただいたことがあります。一回だけの鑑賞という形は、会の方針上なかなか難しい部分があったため、継続して鑑賞していただく形を取りました。 その際には、卒業生や関係者の方々、また鞍手高校夜間部の方々の協力もあり、演劇鑑賞のための助成金のような形で支援をいただきました。その結果、43人ほどの学生の皆さんに鑑賞していただくことができ、一定期間継続して演劇に触れていただく機会をつくることができました。 また、この取組には、鞍手高校の卒業生で俳優として活躍された方とのご縁もありました。当時、鞍手高校夜間部の周年記念の機会があり、記念に残る取組をしたいという思いから、俳優の方に学校を訪問していただいたり、例会の芝居に関連して座談会を行ったり、当日に対面式を行ったりしたこともありました。 ご質問への直接の回答とは少し異なるかもしれませんが、市民劇場としても、子どもたちや学生、保護者の皆さんをどのように巻き込んでいくかということは、活動の中で考えているところです。 私が先ほど学生に対してという話をしたのは、必ずしも一回きりのチケット制だけを意味していたわけではありません。むしろ、若い人たちが演劇や文化芸術に触れる習慣を持つことや、そうした世界に少しでも深く触れられるチャンスをつくるという意味で申し上げました。 チケット制にした場合の財源の課題については理解できます。ただ、例えば海外などでも見られる方法として、当日券に限って、空席がある場合に若い世代へ低額で提供するという仕組みがあります。空席にしてしまうくらいであれば、高校生以下など若い方々に見てもらえる機会をつくるという考え方です。その際、子どもたちは低額で入れるようにし、保護者が一緒に来る場合には、保護者には通常の当日券に近い金額で来てもらうという方法も考えられると思います。子どもだけで来てほしいし、親子で来る場合には保護者にも一緒に来てもらうという形です。空いている席を埋めることは、観客にとっても良い機会になりますし、舞台に立つ役者にとっても良いことではないかと思います。 市民劇場としては、継続的で濃密な鑑賞活動や会員制の仕組みを大切
------	--

(会長)	にされていることは理解しています。ただ、少し覗いてみたい、まずは経験してみたいという若い人たちにとっては、その仕組みが重たく感じられる場合もあると思います。まずは演劇を経験するチャンスをつくるのが大切ではないでしょうか。その経験が、将来的には劇団や市民劇場の運営にとってもプラスになると思いますし、まち全体の活性化にもつながる可能性があります。短期的な収支だけを見るのではなく、もう少し大きな視点で、空いている席があるのであれば若い人たちに開いていく、という形を試してみることも考えられるのではないかと思います。 ありがとうございます。この点については、前回の会議後に、委員と帰る際にも同様の話をしていたところです。私自身も、もともと「こども劇場」に入っていた経験があります。そこでは、確か当日券の販売も行われていたように記憶しています。 また、私自身、東京で大学時代を過ごしていた際には、さまざまなオーケストラの公演を学生券で聴く機会がありました。例えば、NHK 交響楽団や東京フィルハーモニー交響楽団などの公演を、3,000 円や 1,500 円程度で鑑賞することができました。そうした経験からも、若い人たちにまず文化芸術の場に入ってもらい、関心を持ってもらうことができれば、その後も継続的に文化芸術を支える側になっていく可能性があります。将来的には、観客としてだけでなく、文化芸術を支えるパトロンのような存在になっていくことも考えられます。 文化芸術は、最終的には支える人がいなければ成り立たないものだと思います。そのため、若い世代に対して入口を広げていくことについて、できる範囲でご検討いただきたいという趣旨のご意見であったと受け止めました。 もちろん、運営上の難しさや財源面の課題もあるかと思いますが、可能な範囲で検討していただければと思います。ありがとうございます。
(直方市民劇場)	ご意見ありがとうございます。若い世代の方々にも、まずは演劇を見ていただく機会をつくることは大切だと感じています。空席の活用については、市民劇場だけで判断できる部分ではなく、劇団側との関係もありますので、空いた席をどのように扱うかについて、劇団とも相談や交渉を行うことは可能ではないかと思います。 そのため、今後、劇団とも相談しながら、若い世代が演劇に触れやすくなる方法について検討していきたいと思っています。

(会長)	毎回満席というわけではないのでしょうか。
(直方市民劇場)	なかなか毎回満席というわけではありません。会員は約 800 名おりますが、実際の席の状況については、その時々によります。
(会長)	そうなのですね。先ほどからお話を伺っていると、名だたる劇団や俳優の方々が直方に来られているということで、子どもたちや青少年の中にも、見てみたいと思う方はいるのではないかと感じました。そうした若い世代が演劇に触れる機会を広げることにについて、ぜひご検討いただければと思います。ありがとうございます。それでは、引き続きお願いいたします。
(委員)	すみません。実は私自身も直方市民劇場の会員ですが、なかなか毎回は行けていない状況です。ただし、その中でも「これだけは見たい」と思う劇団や、個人的に応援している劇団があり、その時には何とか予定を調整して足を運ぶようにしています。 そう考えると、若い人たちが「見てみたい」と思える演劇や劇団がどういうものなのかについても、少し考えてみる必要があるのではないかと思います。もちろん、これまでにも名だたる劇団や俳優の方々が来られており、大変貴重な機会であることは理解しています。一方で、今の若い方々がどのような演劇であれば関心を持つのか、どのような作品や劇団であれば足を運んでみたいと思うのかという視点も、今後は大切になってくるのではないかと感じました。
(会長)	なるほど。ありがとうございます。確かに、これまで直方市民劇場で上演されてきた劇団や俳優の方々を拝見すると、重鎮クラスの方々や非常に実績のある劇団が多いという印象があります。 一方で、私の周囲を見ても、若い世代の中にも演劇や舞台芸術に関心を持っている人は一定数いると感じています。例えば、私のゼミ生の中にも、東京まで舞台を見に行っている学生が何人かいます。毎年必ずいるというわけではありませんが、パフォーミングアーツが好きで、自分から積極的に見に行っている学生もあり、私自身よりもはるかに詳しい場合があります。 また、私のゼミ生の中には、劇団四季に就職した学生もいました。コロナ禍の時期で大変な面もあったと思いますが、舞台芸術に関心を持ち、そ

(直方市民劇場)	の分野に進んでいく若い人も実際にいます。 そのように考えると、若い世代の中にも、演劇や舞台芸術が好きな人、あるいはきっかけがあれば関心を持つ人はいるのではないかと思います。 先ほどのご意見にもありましたように、毎回ということではなくても、時折、若い方々を引き付けるような公演や、若い世代の感性に合う演目をラインナップに入れていくことも考えられるのではないのでしょうか。 市民劇場の活動を持続可能なものにしていくためには、新陳代謝を図り、若い世代にも関わってもらわなければならないと思います。そのため、若い方々のテイストや関心を少し意識した公演を取り入れていくというご提案として受け止めました。 ありがとうございます。 現在、ユメニティのおがたの大ホールが工事期間に入っており、大ホールは使用できない状況です。一方で、小ホールは使用できるため、小ホールを活用しながら、年に数回の芝居の計画や実施を行っているところです。通常であれば、九州ブロック内で同じ芝居を各地の市民劇場が受け入れ、劇団が九州各地を巡回する形をとっています。その中の一会場として直方も位置づけられています。 しかし現在は、大ホールの工事やステージの関係で、通常の形での上演が難しい状況にあります。そのため、この1年間については、他の団体とは少し異なる演目を選び、実施しています。 具体的には、学校公演などで上演されている作品を多く取り入れるような形で、比較的に見やすい内容の芝居を迎える取組も行っています。 また、来年5月や7月頃の芝居についても、今後計画を立てていく必要があります。その中で、若い方や学生の皆さんにとって、どのような作品が関心を持ちやすいのかということも考えています。 例えば、劇団に所属されている役者の中には、アニメ作品の声優として活動されている方もいます。「ワンピース」や「テニスの王子様」のような人気作品に関わっている方や、ハリウッド映画の吹き替えを担当されている方などもいらっしゃいます。そうした声優としての活動にも焦点を当て、若い世代にとって親しみやすい切り口から舞台に関心を持ってもらうような企画も考えられるのではないかと思います。 例えば、声優として活躍されている役者の方に出演いただいたり、ステージパフォーマンスを行っていただいたりするような新しい企画を取り入れてみても面白いのではないかと感じています。
----------	---

(会長)	今後、関係者とも相談しながら、若い世代にも関心を持ってもらえるような取組について検討していきたいと思います。
(委員)	ありがとうございます。五日市の件につきましても、時間の都合がございましたので、何かご意見等ございましたらご発言いただければと思います。
(五日市委員会)	五日市の取組の中で、筑豊高校の先生にお声掛けをさせていただき、筑豊高校の課題研究のような授業の中に五日市を取り入れていただけないかという相談を行いました。 その結果、商業科の先生方に前向きにご検討いただき、授業カリキュラムの一部として取り組んでいただいています。 現在は、筑豊高校のパンフレットに五日市を掲載していただくようお願いしているところです。 また、販売実習として、うどんの販売を行っている店舗や、長谷川さんのところでの野菜販売などにおいて、高校生が参加しています。毎月参加可能な生徒がローテーションで実習に来ており、うどんや野菜の販売などの実務を経験しています。 さらに、最終的には課題研究の発表として、五日市に関する取組内容について発表を行っていただいています。 このように、実践的な学びの場として非常に良い取組になっていると感じており、今後も継続していきたいと考えています。
(委員)	質問ですが、私自身、30代・40代の頃に五日市に関わっていた経験があります。当時は商店街も非常に活気があり、その頃から商店街の将来についていろいろと言われていたこともありましたが、結果として現在の形になっているのだと感じています。 その上で伺いたいのですが、以前の五日市は加盟店から会費を徴収し、その会費を運営資金としていたと記憶しています。 現在の状況を見ると、加盟店の形態も変わり、テーブル等での販売が中心になっているように見受けられますが、現在の五日市の運営資金についても、従来と同様に加盟店から会費を徴収する形になっているのでしょうか。

(五日市委員会)	加盟料（加盟費）については、五日市を引き継いだ際に一度整理を行いました。それ以前は、前委員会の運用として、加盟店の方が会場でブースの状況等を見た上で、3,000 円・5,000 円・1 万円といった形で金額が決められていたようですが、明確な根拠がない運用になっていたと認識しています。 そのため、現在の運営においては、そのようなばらつきのある設定は適切ではないと判断し、一律で 3,000 円の加盟料を徴収する形に統一しております。 露店につきましては、1 日当たり 1000 円の出店料をいただいております、店舗出店とは、別の扱いにしております。 露店の方については、天候等に大きく左右されることもあり、事前に出店日程が確定しているというよりも、その日の状況によって出店されるかどうかが変わる場合があります。新規で出店される方については事前に調整がありますが、毎月継続して来られる方については、基本的に従来どおりの形で出店されています。ただし、当日の天候が悪い場合や暑さ、体調不良等の理由により、急遽出店されないこともあり、その日になってみないと分からない部分があります。
(会長)	アーケード内でシャッターが閉まっている店舗の前に物を並べて出店されているケースがありますが、その場合、シャッターの閉まっている店舗との間でトラブル等は発生していないのでしょうか。
(五日市委員会)	その点については、現在も一部調整が必要な場合がありますが、これまでの運営の中で一定の調整を重ねており、現在はおおむね各関係者との間で話が整っている状況です。運営を開始してから約 3 年が経過しており、現在は大きな問題なく実施できています。
(委員)	個人の参拝については、代表の方が行っているという理解でよろしいでしょうか。
(五日市委員会)	私と、五日市委員会長と一緒に参拝を行い、その際にお祓いを実施しています。直方駅前の駅舎にてお祓いを行った後、私はうどんの運営に戻り、準備・提供作業を行っております。
(委員)	以前は個人の参拝や神事に関連して、アーケード内に御神輿のような

	ものを設置し、当日来られた方が山へ上がらずとも参拝できるような取組も行っていた時期がありましたが、現在は実施していないようですね。
(五日市委員会)	現在は行っておりません。ですが、当時の話は大変興味深く、参考になります。
(委員)	当時はバスを運行し、遠方から参加者を迎えに行くなどの取組もあり、非常に賑わっていたと記憶しています。会員数も多く、バスが満員になるほどの参加があった時期もありました。当時の賑わいについては、非常に印象的なものでした。
(委員)	先ほどの点に関連してですが、道路上で店を出すことについて、違法になるのではないかという懸念もあると思います。この点について、世の中では同様の事例もありますが、どのような法的手続きを経て実施されているのか、また、出店者側がどのような形で対応しているのかについて、調べていただければと思います。
(事務局)	路上での出店等を行う場合には、道路占用の許可を取得することが原則となります。ただし近年は、いわゆる歩行者利便増進道路制度（通称：ほこみち制度）が整備されており、一定の区域については、道路空間を活用した営業等を可能とする特例制度があります。これについては、以前は特区申請等により運用されていたものですが、現在は全国的に制度化されているものと認識しています。 そのため、こうした制度を活用することで、道路使用に関する許可手続きのもとで営業等が可能となるケースもあるため、状況によっては有効な手法になり得ると考えられます。 また、情報提供として申し上げます。先ほど中高生の商店街への関わりについて課題があるというご意見がありましたが、市と直方エナジーの連携により、商店街の一角（ちょくらじの2階）に、高校生が集まり学習や交流ができる拠点を設置する取組が、7月5日から開始される予定となっています。 このような場が機能すれば、中高生が商店街に足を運ぶきっかけとなり、結果として商店街への回遊や関わりが生まれる可能性があると考えています。
(会長)	ありがとうございます。私も道路占用の許可等については詳細までは

	承知しておりませんが、全国的にも最近では、ヨーロッパやアメリカのように、道路空間を活用して飲食等の出店を行い、賑わいを創出する取組が進んでいると認識しております。 そうした中で、日本においても制度的に工夫すれば実現可能な部分もあるのではないかと考えておりました。 そのため、この点については、どちらの窓口にご相談すればよろしいでしょうか。
(事務局)	商工観光課が所管していると思いますが、確認しておきたいと思います。
(五日市委員会)	その制度は、一部ではなく商店街全体で策定していただきたいですね。
(会長)	その際に、商店街全体として窓口となる組織が必要になるかと思いますが、例えば商店街連合会や振興会のような組織があるのかどうか、そのあたりはいかがでしょうか。
(五日市委員会)	商店組合自体はございますが、現在、市内には主に4つの商店街があり、それぞれの組合については、必ずしも十分に機能している状況ではないと聞いております。
(会長)	そうですね。先ほどからも、高齢化が進む中で、後継者不足などの課題があるというお話も出ておりましたが、商店街組合そのものがどの程度機能しているのかという点も課題ではないかと感じています。
(五日市委員会)	実際には、定期的な集まりが行われていない場合もあり、形式的に組合費や会費の徴収だけが行われているような状況のところもあると伺っています。
(会長)	このような状況は商店街に限ったことではなく、高齢化が進んだマンションの自治会など、さまざまな地域の自治組織にも共通する課題ではないかと思います。つまり、どこが窓口なのかが分からない、あるいは組織として何を担っているのかが不明確になっていると、結果として新たな取組や企画を進める際にも支障が出てくるのではないかと感じています。 現時点で明確な解決策があるわけではありませんが、重要な課題提起

	であると受け止めておりますので、事務局においても記録し、商工観光課等とも連携しながら今後検討していただければと思います。
(五日市委員会)	五日市の取組の中で、高校生との関わりを持つ機会を設けており、その中で「商店街に何があれば行きたいか」という問いかけを行っています。また、筑豊高校の全生徒を対象にアンケートを実施していただき、高校生の意見をまとめていただきました。 その結果として、高校生が求めているものとして多かったのは、個別の店舗というよりも、「椅子・机・Wi-Fi」といった、気軽に滞在できる場所、いわゆる“たまり場”のような空間であるという意見が多く見られました。そのため、商店街側としても、そうした居場所づくりを意識した取組を進めているところです。
(会長)	貴重なデータだと思いますが、可能であればそのアンケート結果について共有いただくことは可能でしょうか。
(五日市委員会)	データ化します。
(会長)	いや、でもやっぱりありがたいですね。貴重なご意見だと思います。 やはりこれまでの議論でも感じていたのですが、ここで話をしているだけで終わってしまってよいのかという思いもありまして、本日終了後に事務局とも少し相談させていただきたいと考えています。例えば遠足のような形で、現地に出向いて直接お話を伺うような取組も含めて、広い意味での社会調査を行う必要があるのではないかと考えております。 その中で、すでに高校生アンケートとしてまとまったデータがあるというのは非常にありがたいことだと思っておりますので、今後の計画策定の検討にも活用させていただければと思います。 その際には、個人情報の取り扱いにも十分配慮が必要だと思いますので、匿名化を前提に整理していただければ問題ないのではないかと考えています。必要であれば同意の手続きも行っていた方がよいと思いますが、可能な範囲で匿名化していただければ活用は可能ではないかと考えます。 それでは、時間も参りましたので、他にご意見がなければ本日の議論はここまでとさせていただきます。 本日はお忙しい中ご出席いただきありがとうございます。今後の計画策定に向けて、引き続きご協力をお願いいたします。

直方市文化芸術審議会 第 5 回会議 議事録

(事務局)	それでは、事務局から連絡をお願いします。 本日はお忙しい中ご出席いただき、また貴重なご意見を賜り、誠にありがとうございます。委員の皆様におかれましては、日頃の日程調整等につきましても、ご協力いただいておりますことに重ねて感謝申し上げます。 また、本日もご出席いただきました五日市委員会の塩川様、直方市民劇場の脇坂様及び高橋様におかれましては、お忙しい中ご協力いただき誠にありがとうございました。 本日いただいたご意見につきましては、事務局にて整理の上、今後の計画修正等に反映できるよう検討してまいります。 次回の第 6 回直方市文化芸術審議会につきましては、7 月 31 日（金）、今回と同様に 14 時から 16 時まで、直方市中央公民館 2 階第 1 学習室にて開催予定としております。 また、先ほど会長からもありましたとおり、文化施設を巡るフィールドワーク的な取組についても予定しておりますので、詳細につきましては今後メール等にてお知らせいたします。 引き続き、直方市文化芸術振興計画の策定に向け、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。以上をもちまして、第 5 回直方市文化芸術審議会を終了いたします。 本日はありがとうございました。
--------------	---

直方市文化芸術審議会 第 5 回会議 議事録